

令和4年度 学校評価 自己評価書 ⑨

あま市立甚目寺小学校

1 総 括

(1) 教育目標（学校経営案より）

「善く生きる子」の育成を目標とし、知・徳・体の調和のとれた人間形成を図るとともに、公共の精神を尊び活力に満ちた心身共に健やかな児童の育成を図る。

(2) 本年度の重点目標

高い目標に向かって、楽しみながら地道な努力を継続できる児童の育成
—スローガン「自分を大切にし、自分に責任をもつ」—

【豊かな心】 行動目標を「自分の居場所と所属感をもとう」とし、常に前向きな気持ちで、周りとの協調できる子の育成を図る。

【健やかな体】 行動目標を「コロナに負けない体と習慣をつくろう」とし、心身共に健康でねばり強く続けられる子の育成を図る。

【確かな学力】 行動目標を「計画性と自主性、責任感を高めよう」とし、気づき、考え、実行し、反省を次に生かせる子の育成を図る。

2 自己評価の実施体制

(1) 調査時期 令和4年12月14日～12月20日

(2) 調査項目 別紙アンケート参照

(3) 調査対象 有効回答者数／対象者数

・児童	276名／全296名	・学校運営協議会委員	6名／全7名
・保護者	366名／全415名	・教職員	31名／全31名

3 調査結果

別紙アンケート結果参照

4 考 察

(1) 児童の評価

- ・ どの項目も8割以上が肯定的な評価であり、多くの児童は概ね学校生活に満足していると思われる。ただ、学年によるばらつきが大きく、学級・学年経営をしっかりと行うことが児童の満足感につながることを再認識した。まずは、落ち着いた生活の中で学習できる環境作りが肝要と思われる。
- ・ 昨年度より6項目で評価が高まり、12項目で評価が下がった。「学校生活は楽しいと思いますか」「学校での学習や生活を通して成長を実感したと思いますか」「先生にあなたの悩みや相談事をしっかり聞いてもらっていると思いますか」等が下がってしまった。コロナ禍の中、楽しい学校を目標に掲げて取り組んできたが、児童のストレスは増していると感じられる。児童の笑顔を取りもどせるよう今後も努力していきたい。
- ・ 「あなたは、家庭学習をしっかりとしていると思いますか」「あなたは、自分から進んで学習に取り組んでいると思いますか」「あなたは自分の思いや考えをきちんと友達に伝えたり、発表したりしていると思いますか」といった項目の評価が上がった。高学年を中心に家庭学習のあり方を見直し、自主勉強を推奨してき

た成果と思われる。

(2) 教職員の評価

- ・ 昨年度より6項目で評価が高まり、12項目で評価が下がった。中でも「あなたは家庭への連絡や情報提供を積極的に行っていますか」「あなたは、児童が学校での学習や生活を通して成長していると思いますか」の質問の評価が下がってしまったのは、働き方改革が進む中で、保護者と情報の共有が十分できなかったり、コロナ禍で児童のストレスが増し、指導に対して十分な満足感や充足感が得られなかったりしたものである。

(3) 保護者の評価

- ・ 児童や教職員とは反対に保護者は、昨年より9項目で評価が高まり、7項目で評価が下がった。子ども達の生活の様子や教職員の取組に対して、概ね満足をしていただいていると思われる。
- ・ 「お子さんは、学校生活を楽しんでいると思いますか」「お子さんは学校での学習や生活を通して、成長していると思いますか」「学校は、家庭への連絡や情報提供を積極的に行っていると思いますか」という項目で高い評価であった。また、地域との連携や基本的な生活指導に関する項目で評価が高まったが、安全・環境面ではやや評価が下がってしまった。

5 成果と課題

《成果》

- (1) コロナ禍でさまざまな制約がある中でも、いろいろな行事や活動を工夫して行ってきたことで、多くの児童・職員・保護者が学校の取組に満足しているようである。今後とも家庭や地域との連携を深め、コロナ禍で失われつつある子ども達の笑顔を取り戻せるよう、さらに工夫をしていきたい。
- (2) 児童の主体的な学びを大切にする授業に取り組んできた成果が少しずつ現れてきている。今年度高学年を中心に、家庭学習での取組について重点的に児童の意識を高めてきた。これらの成果が「確かな学力」に結びついていることを期待している。

《課題》

- (1) ESDの活動がコロナの2年間で途切れてしまったこともあり、アフターコロナに向かってマンネリを打破しながらどう新しく取り組んでいくかを検討していきたい。
- (2) 働き方改革と教職員の満足感・充実感を両立させていくために、職員のライフ・ワークバランスに対する意識を高めていくことが求められる。学校にいる時間だけが研修の場ではなく、日常生活の様々な経験を通して、常に自分の人間性を高められるような職員の育成が求められる。
- (3) 働き方改革を推進するためには、保護者や地域の理解と協力が欠かせない。学校現場の現状を広く知っていただき、地域の人材を生かしながら学校が地域コミュニティの中心となって、みんなで児童を温かく見守っていける環境づくりが求められる。

6 改善策

- (1) 働き方改革を進めるためにも、教職員の授業力の向上は欠かせない。これまで通り、計画的・継続的に研究授業を行ったり、外部の講師を招いたりしながら研修の機会を確保したい。また、市内の学校訪問に担任を積極的に参観させるなど、他校から刺激を受けて教師自らが研修を深めていこうと自覚できる環境作りを行っていきたい。
- (2) 一人に1台ずつ配布されたタブレットの扱いにもだいぶ慣れてきた。今後はそれを生かしながら、職員の研修を深め、「個別最適な学び」や「協動的な学び」に結びつけていきたい。
- (3) 本校は地域との結びつきが強く、ESDの活動を通じて協力体制が築かれている。コロナで中断してしまった活動を復活させ、今後も地域に愛され、地域と共に発展する学校にしていきたい。
- (4) 政府から「異次元の子育て対策」「教育予算の倍増」などの声が聞かれるようになり、これから人や予算が増えていくことが期待できる。そうすると教職員の負担も緩和されると思われるので、ゆとりをもって児童一人一人と向き合い、子ども達の声を大切に丁寧な指導をしていきたい。